(日刊) 新潟日報 2009年(平成21年)7月30日(木曜日)

家主の夢継ぎ開催

30年交流 立教大OB 多彩な企画も

1日から

十日町 病で中断 民具展

明治から昭和の民具や調度品を集めた「石仏・語らいの家」展が8月1日から1カ月、十日町市鉢の民家で始まる。展示会は民家の持ち主の尾身ミノさん(78)が自身で開催する予定だったが、志半ばで病に倒れた。尾身さんの思いに応えようと、30年以上にわたって尾身さんと交流する立教大学のOBが立ち上がり、大地の芸術祭に合わせての開催にこぎ着けた。

所有者の思いを継いで、立教大OBらの力で、8月1日にオープンする「石仏・語らいの家」。明治時代からの民具などを展示する=十日町市鉢

同大は1976年から2年間、学芸員講座の一環で、長期休みを利用した調査実習を鉢集落で実施。その際、尾身さん宅で2週間民泊した縁で交流が始まった。

学生との出会いは尾身さんが民俗学に興味を抱くきっかけになった。学生の帰京後、自宅近くの石仏や集落の女性の暮らしを調査するなどして史料を編さんした。自宅に残る亡き夫の木びき道具は市の博物館に寄贈もした。調査の成果が上がる度、学生に手紙で報告した尾身さん。近年は、集落で収集した明治以降の食器や生活用具、児童の遊び道具などを整理し、自宅2階に資料館をオープンさせることに情熱を燃やしていた。

しかし、3年前に脳出血で倒れ、新潟市の病院に入院。右半身がまひし、自立が困難になった。

「資料館を開きたい」。尾身さんの積年の願いを知ったOBの一人が仲間に報告。展示会開催の機運が高まり、OB約30人に親族らを含めた人たちが昨秋から東京などで打ち合わせを重ねた。

語らいの家では、わらじやかんじきなど民具千点以上を展示するほか、OBの技術を生かした布草履づくり体験、オカリナコンサートなどの多彩な企画を用意した。

OBの後藤廣史さん(54)=東京都=は「収集品と協力者の多さがミノさんの人柄を物語っていると思う。観光客はもちろん、可能であればミノさんにも見てもらいたい」と話した。

問い合わせは語らいの家、025(757)0713。